

※文字の大きさは MS ゴシック /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
 ※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、適宜文章中に挿入してください。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
 ※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

※事務局記入欄

【様式 2】

No.

エントリー名：海南市立亀川小学校

活動名：変わる先生、学校、そして子ども ～アップデート 主体性×対話×DX 改革～

解決すべき課題：

- 子供の主体性の育成の課題・教師の多忙
- 指導観・学習観・研修観の変換の難しさ

子どもの主体性の育成には、本校では長年取り組んできたが、十分定着していなかった。加え、1 クラスの児童数が多く、教員の多忙感から授業改善等に時間を割けないというジレンマに悩む教員が多かった。

目標 【研究主題】人とつながりながら主体的に学ぶ子どもの育成
 ～情報活用能力を生かし自ら考え深め合う授業をめざして～

- 方針
- ① 授業改善・校内研修の充実・先進校視察
 - ② 校務 DX の推進 (Teams の活用)
 - ③ 子どもが選び、子どもが活躍する「こどもが主語」の教育

授業改善等の取り組みを進めるためには、業務軽減と教材研究・研修時間の確保が不可欠である。研究授業や校内研修、先進校の視察などを通じて、教員が学ぶ機会を増やすことで、自然と授業が変わり、子どもたちの姿にも変容があると想定する。子どもの力と先生方の力を信じ、双方に委ねる「相似形」の関係を意識しながら、自由度の高い研究と校務 DX を推進していく。

活動内容：

① 教師の学び方改革 (方針①)

- ・研究方針の共有化・カリキュラムマネジメント・情報活用能力育成校内ルーブリック作成。
- ・複数名での先進校視察や研究会参加し、校内で報告会の実施。オンライン研修の環境整備。
- ・校内研修改革として「授業改善プロジェクト」に着手。

② Teams を活用した校務軽減 (方針②)

- ・ジャンル別のチャンネル(「日報」「学年」「研究授業」等)を作成。各担当が情報を発信。閲覧後は、スタンプ やコメントでリアクション。学年チャンネルでは、日々の実践や悩みを共有。授業研チャンネルでは、リアルタイムにチャットにコメントや写真をアップし情報共有。

③ 子どもに委ねる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実 (方針③)

- ・単元内自由進度学習、マイプラン学習や5年生の算数科の反転学習などの授業形態の変革。
- ・「校内マラソン記録会」を、子どもが種目選択する「ランランフェスティバル」に変更。
- ・「運動会」の競技種目を1～6年生の選択制にし、ブロック制でもなく対抗戦でもなく子どもの第1希望を優先。子どもの思いが発揮できる運動会「カメリンピック」に改革。

取組の過程：

【令和4・5年度】情報活用能力を軸に研究 カリキュラムマネジメント・ルーブリック作成

『そもそも情報活用能力とは何か』

一人一台端末の導入により、授業での活用方法について教員が試行錯誤を重ねていた。そこで本校では、情報活用能力育成を新たな研究テーマの軸として設定した。しかし当初はその定義すら曖昧な状態であった。和歌山大学の豊田教授の指導のもと、7月に情報活用能力育成ルーブリックと年間指導計画をなんとか全職員で作成。年度末には、「子どもの実態に合ったルーブリックに改良したい」という声上がり、改訂版を作成。令和5年度4月に全児童にも配布し共有化を図った。12月には、市内教員対象に授業公開。本校の「だれと・どこで・どのように」学ぶか子どもに委ねた学習スタイルは、他校一部教員から「勝手に教室を移動してケガとかあったら。教師としての責任は？」といった批判もあった。また本校でも、児童の理解度の把握が難しいのでは、と本校の学習スタイルの良さを実感できずに戸惑う声があった。情報活用能力育成というフェーズを経て次の授業観変換への困難さが浮き彫りになった。

【令和6年度】単元内自由進度学習と校務 DX ～文部科学省リーディング DX 指定校～

2年間の実践を踏まえ、情報活用能力育成には、個別最適な学びと協働的な学びの一体化の充実が不可欠だと実感した何人かが、さらに授業を変えようと単元内自由進度学習等の授業にチャレンジし始める。手探りであったがやれるところから始め、授業を公開する方法で研究を進めた。同時に Teams を活用した校務軽減を並行して実行した。加賀市立庄小学校と春日井市立出川小学校への先進校視察が本校の研究を加速させた。自分のめあて、学習内容・方法・時間を子ども自身が決め、必要に応じて友達と対話しながら各教科等の見方・考え方を働かせながら学ぶ子どもの姿が見られるようになる。研究協議会は、8月から熊本大学特任教授前田康裕氏の指導のもと、授業改善プロジェクトとして「対話とリフレクションによる授業研究会」へと刷新する。参加者が対話による概念化を通して自分の授業を振り返る授業研究会となる。1月には、1年生と2年生が算数科のマイプラン学習を実践したことで、全学年で単元内自由進度学習の実施となった。校内マラソン記録会を、着順とタイムを競うレースコースと仲間と楽しく走るジョグコースの選択制の「ランランフェスティバル」に変更したのも令和6年度であった。

【令和7年度】「授業改善プロジェクト」3つの柱「対話」「教材・学習課題」「自己調整学習」

『1年通して「授業改善プロジェクト」に取り組みたい』

研究部のメンバーからこのような申し入れがあった。昨年度末の教員アンケートで、「対話」「教材・学習課題」「自己調整学習」の3点が共通の課題として挙げられていた。そこで、令和7年度はこの3つを研究の柱とし、各教員が個別に最適な課題を設定し、協働的に解決していくプロジェクト型校内研修を実施することとなった。この「授業改善プロジェクト」開始にあたり、研究構想図と年間イメージ図を作成し、研究方針の共有化を図った。これを受け、早くも5月に Teams 上で「これってマイプラン？」と初チャレンジの投稿があるなど、それぞれで実践した。夏季研修ではグループごとに研究の進捗状況や悩みを交流した。この授業改善プロジェクトの成果は2月の成果報告会で明らかになる予定である。



一方、今年度は運動会の改革に着手した。前例踏襲ではなく、子どもが競技種目を選択できる「子どもが主語」の運動会を目指した。従来の運動会でも十分保護者も子供も楽しめていたため、変更の必要性に疑問の声もあった。しかし、体育部から「子どもに委ね、子どもの思いが発揮できる新しい運動会にしたい」との提案があった。その提案時に、みんなから「めざす理念は理解できる」との反応があった。着実に『観』の変換が起こっていたと確信する。ただ、すぐに「それでやろう」とはならず、全職員が運動会という同じ土俵で「子どもの思いが発揮できる運動会」という理想と「初めてのことへの不安」や「心配」の間で揺れる気持ちを率直に語り合う本音の対話が行われた。この対話こそが、運動会(改称カメリンピック)の成功を導く原動力となった。見栄えや揃えることを重視した従来型の運動会から、体育の授業を基盤に、個々の子どもの思いを大事にする「子どもが主語」の取り組みへと転換することができた。

活動の成果：教師の意識改革(観の変容)により、子どもの思考が表出し、子どもが活躍する場面が増えた。授業では、誰とどこでどのように学ぶか、めあて、方法、時間を自分で考えて学習している姿がよく見られるようになった。子どもが自走して学ぶ姿から、子どもは教員が考えていたよりずっと手前で困っていることもわかった。子どもの姿から、授業デザインに修正を加えるなど教師主導型から子ども中心の授業へ変化したと言える。また、子どもの変容として、

- ① 思考力・判断力・表現力の向上(全国学力・学習状況調査で3教科全国平均を上回る)
- ② 一斉型授業に戻した際、5年生から「先生、マイプラン学習に戻してほしい」との声。
- ③ 全員参加の子ども主体の学校行事の実現(練習が苦手で欠席していた子が参加できた)

この3つを挙げる。また、校務軽減等もさらに新たな方法を模索中であるが、この常に新しいことを模索する職員間の対話力、そして教員の主体的な研究姿勢も大きな成果であると考えている。